2025年7月27日　第二礼拝

説教題「『ところが』の希望」使徒言行録５章27～42節

主任牧師　加藤　誠

「あの計画や行動が人間から出たものなら、自滅するだろうし、神から出たものであれば、彼らを滅ぼすことはできない。」（使徒言行録５：３８～３９）

使徒言行録の弟子たちを見ていると、主イエスが語られた「からし種」のたとえの言葉が重なって響いてきます。「神の国は…からし種のようなものである。土に蒔くときには、地上のどんな種よりも小さいが、蒔くと、成長してどんな野菜よりも大ききくなり、葉の陰に空の鳥が来て巣を作れるほど大きな枝を張る」（マルコ４：30～）。

ペトロたちは吹けば飛んでしまうような小さな小さな存在でした。しかし主イエスの慈しみと忍耐強い祈りの中で、ペトロたちは神の国を証しする働きに立てられていきます。聖書が語る真理は「自らの小ささを知る者こそが、神の器として豊かに用いられる」ということです。逆に、自らの大きさ、力に頼る者は、神の国の喜びにあずかることができません。ボンヘッファーという牧師はこう語っています。

「私は自分の力に信頼することによって、弱くなり、病める者となってしまう。私は自分の財産の上に家を建てることによって、その財産を一夜にして奪い取られてしまう。私は名誉と力に依り頼むことによって、深い底に転落ししまう。私は自分の正しさに得意になることによって、罪に打ち負かされてしまう。しかし、もし私の目がただ神のみ言葉にのみ向けられるなら、その時私は滅びないであろう。なぜなら神のみ言葉は決して破壊されないからである。そして神ご自身が、み言葉を保持し、み言葉を仰ぎ見る者を皆、まもられるからである。」

聖書の信仰はイエス・キリストという方に目を注ぐことです。この方にしっかり目を注ぎ、目を離さないなら、私たちは嵐の湖の上を歩く者とされる。しかし、この方から一瞬でも目を離したならアッという間に湖の中に沈んでしまう。十字架を前に小さく砕かれ、ただイエス・キリストの愛と憐みにのみ目を注ぐ者とされたとき、弟子たちは大きな枝を張るからし種として、この世界の中に立てられていったのでした。

今朝の箇所は３章で生まれながら足の不自由な男をペトロたちが癒した出来事の続きです。28節「あの名によって教えてはならないと厳しく命じておいたではないか！」。エルサレム神殿の権力者たちが、ガリラヤから出てきた「無学な普通の人」であるペトロたちに苛立っています。自分たちの最高権威がまったく通じない。「人間に従うよりも、神に従わなくてはなりません」（29節）と堂々と答えるペトロたちに、最高議会の人々はますます激高し、弟子たちを殺そうと怒りに燃えたのでした（33節）。

この５章の一連の出来事の中で、神ご自身がペトロたちの信仰と行動を守り励ましておられることが、二つの「ところが」という言葉で示されています。

一つ目の「ところが」は19節「ところが、夜中に主の天使が牢の戸を開け…」。信じがたいことです。私たちの理性ではとても理解できません。その報告を受けた権力者たちも戸惑い恐れました。この天使の言葉がなんと力強いことでしょうか。「行って神殿の境内に立ち、この命の言葉を残らず民衆に告げなさい」（20節）。主の天使が弟子たちに勇気を与えたのです。人間が太刀打ちできるわけがありません。

もう一つの「ところが」は34節です。最高議会の人々が殺意に燃えた時に、律法の教師であるガマリエル（パウロの先生）がこう語りだします。「あの者たちから手を引きなさい。…あの計画や行動が人間から出たものなら、自滅するだろうし、神から出たものであれば、彼らを滅ぼすことはできない」（38節）と。最高議会の議員は70人いたそうですが、一人の意見で69人の怒りが鎮められていきます。これも神の業以外の何物でもありません。ペトロたちから見ると「敵」の中に「神の使い」が立てられていくのです。神はご自身のご計画を進めるにあたって、私たちの思いや考えを超えた「ところが」を用意される。その最大の「ところが」はキリストの十字架と復活です。先ほどの牢獄の扉を天使が開けた個所を読むと、どうして神は十字架で苦しむ主イエスに天使を送ってくださらなかったのかと思います。今の世界にも「神様、今こそあなたの天使を送って助けてください！」という出来事があふれています。しかし神は復活という「ところが」を用意されていました。十字架で人間の救いがたい罪が明らかにされ、弟子たちの信仰が木っ端みじんに砕かれて、それでも神の真実の愛は変わらない。神の「ところが」の希望が明確になるために、十字架では天使を送らず、復活の場面で天使を送るのです。ですからもし今「神様、どうしてですか？」と理解できないことに直面したとしても、神の「ところが」を信じていきましょう。神の「ところが」に希望をおいて命の言葉を伝えていく。ここに教会の使命があります。

そして実はもう一つ、この5章に語られている「ところが」があります。1節「ところが、アナニアという男は…」。アナニアとサフィラという夫婦が献げものをごまかし、神の裁きを受けて死んでしまうという衝撃的な事件の冒頭に出てくる「ところが」です。これは「人間のところが」です。その直前には初代教会の人々が持ち物を共有し、バルナバが畑を売った代金をささげています。ペトロによると、財産の共有や献金は決して強制ではなく自由意志だったようですが、バルナバの行動が賞賛される中に「人間のところが」の弱さがあらわになります。どんなに神の国の喜びがあふれても、私たちが心奥深くに抱える罪、弱さや危うさがすべて消えて完全無欠になるわけではない。アナニアが何に心奪われて「神を欺いて」しまったのかはわかりませんが、私たちもアナニアと変わりません。主イエスと神のみ言葉から目を離すなら、あっという間に深い底に転落してしまう私たちなのです。アナニアの姿に自分の弱さを重ねつつ、神の「ところが」の愛と赦しの希望に目を注ぐ信仰をいただいていきましょう。